

博士学位論文審査要旨

2012年7月17日

論文題目： 日本における宗教間対話と政教関係—滝沢克己を中心に—

学位申請者： 杉田 俊介

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 水谷 誠

副査： 神学研究科 教授 原 誠

副査： 神学研究科 教授 小原 克博

要 旨：

本論文は、キリスト教と諸宗教の関係を考察する「諸宗教の神学」の成果を踏まえながら、それを批判的に検証し、それに付随する課題を日本的な文脈で対象化し、西洋的な議論からは十分に見えていない側面に光を当てようとしている。西洋におけるこの種の議論の背景には、現代社会の世俗化や多元化がある。1980年代以降、この分野では、ジョン・ヒックの「宗教多元主義」が中心的な役割を果たしてきた。ヒックによれば、諸宗教は唯一の神に対する異なった仕方での応答であり、キリスト教はそのひとつに過ぎない。しかし、ヒックを含め、諸宗教の神学の多くの議論は、西洋の宗教状況を念頭に置いており、また、主として宗教哲学的な次元においてなされてきた。つまり西洋以外の宗教状況や、非宗教的な諸力が諸宗教の関係におよぼす影響をふまえた議論は、まだ十分になされておらず、本論文はそうした未開拓の領域に考察を進めていこうとしている。

非西洋社会において、キリスト教は、諸宗教との関係をどのように考えるべきなのか。この問いかけに応答する手がかりとして、本論文では日本の神学者で、第二次世界大戦後の日本におけるキリスト教と仏教の対話を主導した滝沢克己に注目している。しばしばヒックの思想との類似性も指摘される滝沢の思想は、とりわけ近代日本の政教関係を顧慮したときに、どのような意義と限界を見せ、また現代の諸宗教の神学にどのような問題を提起しているのかを考察することで、本論文は、この領域に新たな論点を導入しようとしている。

序論（第1部）では研究史的に上記の課題を整理し、第2部では、現在の諸宗教の神学の議論の状況と課題を概観している。加えて日本のキリスト教と諸宗教の対話における問題点を、近代日本の政教関係との関連を意識しつつ論じている。明治期に形成された「日本型政教分離」のもと、キリスト教が対話する相手は、みずからと対等な「宗教」である仏教にほぼ限定されることになった。宗教状況が大きく変化した大戦後も、仏教のみを対話の相手とする傾向はあまり変わらなかった。またそこでなされる対話は宗教哲学的次元のものが主で、諸宗教相互の関係と政治的次元との関連などを考慮した対話はなされなかった。

第3部では、こうした状況を踏まえた上で、滝沢の宗教間対話論を批判的に検討している。ここでは、従来検討されなかった滝沢の新宗教や天皇制についての議論を主な考察の対象としている。滝沢の宗教間対話を理論的に基礎づけるのは、インマヌエル思想である。そのポイントは、神人の第一義の接触と第二義の接触の区別にある。滝沢によれば、第一義の接触は万人に成立した神人の原関係である。そして第二義の接触は第一義の接触を人が受け入れるとき、はじめて生起する。滝沢によれば、イエスは、第一義の接触を受け入れて十全な仕方第二義の接触を生起させ、他の人々の基準となった。だが、第一義の接触が万人に成立している以上、第二義の接触

を生起する可能性も、非キリスト者を含む万人に開かれている。滝沢はこの思想にもとづいて、キリスト教以外の諸宗教にも神人の原関係の優れた表現を見出し、諸宗教との対話にかかわっていった。本論文では、特に新宗教や天皇制との対話に焦点を当てており、そこに本論文の方法論上のユニークさを認めることができる。

第4部では、以上の議論の成果を展開する形で、諸宗教の神学に対する問題提起を行なっている。滝沢はキリスト教と仏教だけにとどまらず、諸宗教との対話の道を開き、キリスト教の自己理解や他宗教理解の批判的検討を促した。ただし、滝沢の議論において、いかなる対象に神人の原関係の優れた表現を見出すかは彼の経験に依存しており、この経験自体は時代の支配的イデオロギーと無縁ではなかった。結果として滝沢は、その「多元主義」的な思想によって国家を正当化することになった。彼の思想は近代国家の秩序との関係によって強く規定されていたのである。このような滝沢の多元主義的思想の問題点を踏まえて、キリスト教神学の立場として類型化された「排他主義」、「包括主義」、「多元主義」のいずれか特定の立場を諸宗教との関係をめぐる唯一の解決策とすることはできないことを指摘して、国家イデオロギーへの抵抗という観点から「排他主義」の持つ積極的側面にも光をあてている。本論文は、従来の宗教間対話の議論に欠落しがちであった政治的力学関係を考察した上で宗教間の関係を問い直している点で秀逸である。

本論文は、滝沢をめぐって検証された近代日本における政教関係と、終盤で提示された現代の政教分離の問題とが十分に関連づけられていないという課題が残るものの、以上のように、西洋および日本における先行研究の蓄積を踏まえながら、宗教理論に政治的イデオロギーも関与する点を的確に指摘し、生産的な議論の土台を提示した。よって本論文は、博士(神学)(同志社大学)の学位を授与するにふさわしいものと認められる。

総合試験結果の要旨

2012年7月17日

論文題目： 日本における宗教間対話と政教関係―滝沢克己を中心に―

学位申請者： 杉田 俊介

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 水谷 誠

副査： 神学研究科 教授 原 誠

副査： 神学研究科 教授 小原 克博

要 旨：

杉田俊介氏は、2007年3月に同志社大学大学院神学研究科博士課程の前期課程を修了し、同年4月に後期課程に入学して研究指導を受け、所定の要件を満たすと共に、学位論文を提出した。2012年7月17日13時20分から、およそ2時間にわたって神学研究科委員会は総合試験を実施し、杉田氏から十分な神学的素養を背景にした的確な応答を受け、また学位請求論文の主題領域について深い認識を有していることを確認した。また、研究に必要な語学力(英語、ドイツ語)を十分に有していることが確認された。

以上の結果により、総合試験に合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 日本における宗教間対話と政教関係——滝沢克己を中心に——
氏名： 杉田 俊介

要 旨：

20 世紀後半以降のキリスト教神学では、諸宗教との関係をどう考えるか、また諸宗教との対話をいかに実現していくかが、重要なテーマとなっている。キリスト教神学において、このテーマが重要なものとして意識されるようになった大きな背景には、世俗化と、それと密接に結びついた多元化によって、「教会の外に救いなし」という定式に代表される、諸宗教との関係についての既存の理解が説得力を失ったことがある。またこの定式に代表されるキリスト教の絶対性の主張が、西洋列強の帝国主義や非キリスト教徒への差別と結びつき、悪しき結果をもたらしたことへの反省もある。

これら 20 世紀後半のキリスト教神学でなされた、神学的視点から諸宗教との関係について考える議論は、現在では「諸宗教の神学」と呼ばれる。諸宗教の神学において、長らく中心的な役割を果たしてきたのは、ジョン・ヒック(1922-2012)の「宗教多元主義」といえよう。ヒックによれば、イエスは、「神と人間との唯一の効果的な接点」ではない。諸宗教は唯一の神(あるいは究極的実在)に対する異なった仕方での応答であり、キリスト教はそのひとつに過ぎない。

こうしたヒックの主張は、1980 年代以降広く関心を集め、彼の「宗教多元主義」思想についての多くの著書や論文が出されることになった。他方で、ヒックが、個々の宗教の自己理解に反して諸宗教に共通の本質(唯一の神、究極的実在)を想定していること、その結果として、各宗教の独自性が軽視されてしまうことに対しては、これまでも批判がしばしばなされてきた。今日では、ヒックの議論の問題点をふまえつつ、キリスト教と諸宗教の関係をいかに考えていかに、関心に移りつつある。

また、ヒックをはじめとする諸宗教の神学の代表的な議論の多くは、西洋の宗教状況を念頭に、主として思想的な次元においてなされてきた。したがって、非西洋社会の多様な宗教状況や、国家をはじめとする「非宗教的」な諸力が、キリスト教と諸宗教の関係におよぼす影響などをふまえた議論は、十分にはなされていない。キリスト教が少数派である非西洋社会において「宗教多元主義」に代表される従来の諸宗教の神学はどのような意味をもつのか。また、そうした社会において、キリスト教は、諸宗教との関係をどのように考えるべきなのだろうか。

かかる問いについて考察するため、本稿では日本の神学者・思想家で、「宗教多元主義」の先駆ともいべき議論をなした滝沢克己(1909-1984)に注目する。滝沢は、戦後日本におけるキリスト教と仏教の対話に貢献した人物として、高い評価を受けている。また滝沢の思想は、ヒックの「宗教多元主義」思想との類似がこれまでも指摘されてきた。ゆえに滝沢の思想の意義と限界を考察することによって、ヒックの「宗教多元主義」にも遡及する現代の諸宗教の神学の問題点をあぶりだすこともできるだろう。

滝沢はキリスト教と諸宗教の関係をどのように考えたのか。また、滝沢の「宗教多元主義」的思想は、日本の政教関係のなかで、どのような意義と限界をあきらかにすることになったか。そして彼の議論は、現代の諸宗教の神学にどのような問題を提起するのか。こうした点について考察することが、本稿の課題である。

本稿の議論は、次のように進む。第 2 部の前半では、現在の諸宗教の神学の議論の状況と課題を、レイスの三類型(「排他主義」「包括主義」「多元主義」)や上述のヒックの「宗教多元主義」思想を中心に紹介する。そして第 2 部後半では、戦後日本のキリスト教と諸宗教の対話のあ

り方とその問題点を、日本の政教関係との関連を意識しつつ論じる。近代日本のネーション形成の際には、天皇の権威を中心にして宗教の再編成が行われ、仏教、教派神道、キリスト教などの「宗教」が、その自由な活動によって天皇、国家への貢献を競いあうという政教関係が成立した。この政教関係のなかで、キリスト教が対話(批判的なものもふくめ)する相手は、みずからと同じ「宗教」である仏教にほぼ限定されることになった。宗教状況が大きく変わった戦後も、一部の例外をのぞき、キリスト教の対話の相手はほぼ仏教に限定され、内容も宗教哲学的次元でのものにかぎられていた。滝沢やヒックの思想が、日本の政教関係のなかでどのような意味をもつのか、十分に検討されることもなかった。日本の政教関係を考慮にいて、諸宗教の神学を問いなおす必要があると考えられる。

第3部では、こうした課題を意識しつつ、滝沢克己の宗教間対話論を批判的に検討する。なお本稿では、従来あまり検討されてこなかった滝沢の新宗教や天皇制についての議論を、主たる考察の対象とする。滝沢の宗教間対話を理論的に基礎づけるのは、彼のインマヌエル思想である。そのポイントは、イエス・キリストにおける神人の第一義の接触(=第一義のインマヌエル)と第二義の接触(=第二義のインマヌエル)の区別にある。滝沢によれば、第一義の接触は万人に成立した神人の原関係であり、第二義の接触はこの原関係を人がうけいれるとき、はじめて生起するものである。滝沢曰く、イエスは、第一義の接触を十全な仕方を受けいれ、ほかの人々にとっての模範となった。だが、イエスとほかの人々のあいだに本質的な差異はない。神人の原関係が万人に成立している以上、神人の原関係を受けいれ、それを優れた仕方では表現するものが生まれる可能性も、イエスのみならず、宗教のちがいを超えてすべての人に開かれている。滝沢はこのインマヌエル思想にもとづいて、仏教や清明教(世界救世教系の新宗教)といった諸宗教に神人の原関係の優れた表現をみだし、宗教間対話に積極的にかかわっていった。上述の通り、こうした滝沢の思想については、ヒックの「宗教多元主義」思想との共通性がしばしば指摘される。しかし滝沢は、仏教や清明教との対話にとどまてはいない。彼は、日本の国体において神人の原関係の美しい表現があると論じ、天皇制国家の優秀性を神学的に弁証した。

第4部では、第3部までの議論をふまえて、諸宗教の神学に対する批判的検討を行なう。滝沢は「多元主義」的なインマヌエル思想にもとづいて、キリスト教と諸宗教との対話の道を開き、キリスト教に興味深い問題を提起した。新宗教との対話にとりくんだことは重要な業績である。しかし、そのおなじ「多元主義」的な思想によって、滝沢は天皇制、国家の神学的弁証を行なった。滝沢の議論において、いかなる対象に神人の原関係の優れた表現をみいだすかは、滝沢の直接的経験によって大きく左右されている。しかし、その滝沢の経験自体に、すでになんらかの仕方では共同体に承認された価値観が反映する。天皇制論において、滝沢は当時の国体イデオロギーによって強く規定されていた。この結果、滝沢の天皇制論は、国体イデオロギーを追認するものになってしまった。こうした危険は、ヒックの「宗教多元主義」思想にもあると言いうる。

他方、従来「排他主義」と呼ばれてきた神学的立場の、積極的側面にも目を向けねばならない。滝沢の師カール・バルトは、「排他主義」の代表として言及される。ただそのバルトが、滝沢がドイツに留学した1930年代、告白教会の思想的リーダーとして、ナチスに抵抗したのである。「多元主義」的な立場をとる滝沢は国家主義を正当化し、「排他主義」的な立場をとるバルトは国家主義に抵抗した。「イエスのみ」という信仰は多元性を破壊するものに対する強力な抵抗の礎ともなる。つまり、「排他主義」、「包括主義」、「多元主義」のいずれか特定の立場をもって、諸宗教との関係をめぐる諸問題の唯一の解決策とすることはできない。

真に諸宗教との共存を実現していこうとするなら、議論の軸足を移さねばなるまい。キリスト教と諸宗教のあるべき関係を考えるとき、「宗教」を教理や信仰の態度に還元してしまうのには無理がある。近代以降の社会において、キリスト教と諸宗教の関係のあり方は、とりわけ近代国家の秩序との関係によって強く規定されている。重要なのは、宗教地形において中心的な位置にあるものと、そこで周辺化されたものを見極めることである。滝沢は天皇制論において、天皇制

を神学的に正当化し、ナショナリズムとの距離をとることに失敗した。こうした議論は、それが「多元主義」的な論理によるものであれ、排除と抑圧を隠蔽するイデオロギーとして機能する。

他方、新宗教論においては、正当な対話の相手とみなされてこなかった新宗教と対話し、結果的に諸宗教の神学のあり方に一石を投じることになった。この後者のようなケースに積極的な問題提起を認めて多元主義を再検討していくことは諸宗教の対話にとって重要な課題である。